

生活科と総合的な学習(総合・探究)はどうつながるの？

—「問い？」と「納得！」を発展的に繰り返す

しまの みちひろ
元文教大学教授 嶋野道弘

「あそんで 作って くふうして」の活動です。「わたしは、ふだんのんだりたべたりすると、いつもはすてちゃうものをあつめておいてあそぶと、たのしめることがわかりました。ころがしたり、なげたり、ふったり、ほかにも、つむ、こする、たたくなど、いろんなあそびかたがあります。もっとあそびたいです」

生活科は、子どもの生活から活動を立ち上げ、学んだことを自分の生活にもどして、自立し生活を豊かにしていく創造的な学びです。それは、活動する中で生じる思いや願いを、試行錯誤しながら実現していく行為です。『もっと～。今度は～』というように発展的に繰り返されます。ここで培われる学びの体験や主体性、創造性、学びに向かう力は総合に引き継がれ、実社会や実生活の中から問いを見だし、自分で課題を立てて本質を探っていく探究的な学びとになっていきます。

「町の自慢は何だろう？」という3年生の総合です。「町にはいろいろな予約があって、町のみんなが考えたり工夫したりして暮らしていることがわかりました。わたしはそれが本当の町の自慢だと思いました。わたしは『本当の町の自慢です』と言えるものができたので、自分も町の人の一人になれたのかなと思いました」

歯医者さんの予約診療や人気のお菓子屋さんの予約販売など、町にある予約に関心を持った子どもたちは“予約探し”を通して学び方やものの考え方を学びました。町の人々の知恵を生かした暮らしぶりを知って「町の自慢」という探究課題の概念を具体化し、本当の意味を突き止め、自己認識を高め、自己の生き方を考えました。

『なんでだろう？』という疑問や不思議を自ら見つけ出し、問いをもち、解決すべきことをつかみ、解決に至る過程をたどれば『なるほど、そうか！』という納得に行き着きます。そもそも人間は生活の中でそれを行っているのです。「問い」と「納得」を発展的に繰り返す行為は、人間の本性であり強みであり、人間の学びや豊かな生活に欠かせないことです。生成AIが発達する中で、生活科と総合・探究の学びは、人間を中心にした人間の強みを育てる教育としての重要性が高まっています。



嶋野道弘

元日本生活科・総合的学習教育学会会長。公立小学校教員、埼玉大学附属小学校教員、埼玉県教育委員会指導主事、文部省小学校課教科調査官、文部科学省主任視学官、文教大学教育学部教授・同大学院教育学研究科長を歴任。光村図書「せいかつ」教科書編集委員。生活科・総合的な学習の時間の創設・啓発に関わり、以来、子どもの学びに基軸を置き、その研究と教育の活性化に向けて取組んでいる。著書に『育て！子どもの学ぶ力―「総合的な学習の時間」の教育原理』（全国学校給食協会）などがある。